



1960-1966

団塊の世代、ついに出現す！



後列左より、倉沢・太田・渡辺・村田・和田・木元・ヒルケル・角堂
前列左より、足立先生・佃先生・陳・湯川

国体の夢消える

昭和22年、太平洋戦争が終わり、戦地からの引き揚げがようやく落ち着き、ヤミ市全盛の戦後ドサクサの時代に僕達団塊の世代は生まれた。何しろ人数が多く、小学校のクラス数は前年の2倍もあり、教室がなくて、午前午後の2部授業という時もあった。

そんな中で六甲に進学し、当時全くマイナーなスポーツであったサッカー部に10名が入部した。物がまだ少ない時代で、ボールは年間10個位しか購入出来ず、ゴムのチューブに空気を入れて入口を皮ヒモで縫い合わせるのが僕

達の練習前の作業であり、ボール入れの名人は、村田で、パンク常習犯は田川だった。

靴はほとんどズックで、初めてスパイクをはいたのは、兄のお古をもらった渡辺で、続いて角堂が母親に買ってもらったミズノの黒光りするスパイクを見て、僕達はため息をついたが、それは何とラグビー用のやつで、みんなで笑いこぼれた。親たちには、サッカーも、ラグビーも、ホッケーもみな一緒に、区別のつかない様な時代だった…。

中2の時、神戸市の大会に全勝し、大阪、京都、神戸の三都市大会も優勝

し、高校になってからも順調にチームは戦績を残し、初の国体出場に僕達の夢はふくらんでいった。決勝で関学に当たると確信していた準決勝戦、無名の福崎高校に1-2のまさかの敗戦を喫して、六甲サッカー部が切望していた国体出場の夢はその日であっけなく終わってしまった。

近ごろ、暑くてノドの乾いた日、太陽の下にいるときまって中1の夏の合宿を思い出す。大学を出たばかりの佃先生が輪の真ん中で大声を出し、キャプテンの港、井田さんがもったいけと言ひ、大学生の太田さんが根性根性とくり返す。僕たち中1は、怖いもの



中学、神戸市三都市大会優勝。22期・23期

見たさの夜店の見せ物小屋を見物する様に、輪の一番外側で座りながら、早く練習が終わって、ワタナベのジュースの素で、ノドを潤す事だけを考え、陳と和田は合宿逃亡を計画する。ただ木元だけは、全員の練習が終わってから、響尾さんと一緒にキーパーしごきがあるからいつも最後までクタクタだった。食事当番は合宿中の唯一の楽しみだった。なぜなら、練習を途中でやめられ、ヒルケルさんのトラックで篠原の市場へ買い出しに行く事が出来た。つい先程まで苦しそうな顔をしていた太田と倉沢は、まるで人が変わった様にうれしそうな表情でトラックの荷台に乗って、六甲坂を下っていった…。

昭和39年、僕たちが高2の時、東海道新幹線が営業を開始し、アジアで初めてのオリンピックが東京で開催された。

サッカーもドイツ人のクラマーコーチを招いて、新しい理論が浸透し始め、スポーツにも政治にも、芸術にも新しい波、そうヌーベルバーグが押し寄せ、無限の可能性をもった未来に僕達の胸は高鳴った。何もかもがキラキラと輝く高校生活であった様な気がする。そして、戦中、戦後の貧しい日本は、物のあふれた豊かな国に変貌していった。けれども、その中で一番困惑していたのは、豊かな伝統や文化を持ったドイツから来たヒルケルさんその人じゃなかったのかなァという気がしている。

ヨーロッパ大陸の東のアジア大陸のそのまた東の海の島国に、ヒルケルさんはどんな思いをして貧しかった日本にたどりつき、どんな思いをして、こ

の日本の発展を、そしてサッカー部の僕達を見ていたのだろうか……？

[湯川 昌明]



夏の合宿。18期、太田省司さんがスキヤキの料理長であった。